

平成 30 年 5 月 22 日 (火)

ないじえる芸術共創ラボ 古典インタプリタ日誌 ピーター マクミラン氏 WS とくさ 『阿不幾集』について—木賊をどう訳すか—

1,5 回目のご来館

マクミラン氏 5 回目のご来館では、マクミランさんが関心を持っておられる資料をご覧いただき、恋田知子先生（当館准教授）と話し合いを重ねながら卷子本『阿不幾集』(図 1)¹ の翻訳に取り組みました。

図
1



またこの日は、今年（2018 年）8 月に出版される予定の新版英訳百人一首“*One Hundred Poets, One Poem Each*” (Penguin Classics) をお持ちくださいました。「扇の草紙」には百人一首の歌も含まれており、昨年度の鳴子でのワークショップでご紹介くださった「奥山に」の新訳はその一例です。「ないじえる芸術共創ラボ」での成果で

¹ 請求記号 99-73

もあります、と、笑顔で語ってくださいました。



2, 伊勢物語の絵本

「扇の草紙」には『伊勢物語』の歌も含まれています。

マクミランさんは以前『伊勢物語』の英訳“*The Tales of Ise*” (Penguin Classics、2016 年) を出版しておられ、『伊勢物語』については強い関心を抱いておられます。

この日はマクミラン氏のご希望で、当館所蔵の『続松紀原 うたかるた』(図 2)² をご覧いただきました。

² 請求記号：ナ4-685-1~3

平成 30 年 5 月 22 日 (火)

本作は、江戸時代に出版された絵入本で、『伊勢物語』の様々な場面を見開き一図で描かれ、場面の説明や人物の台詞が易しい言葉で書き入れられたものです。

図
2



絵や色彩に強く関心を抱いておられるマクミランさんは、特に、挿絵に塗られた色彩に注目しておられました。

この色彩は恐らく元の持主が施したものと思われますが、大変丁寧に塗られており、しかも色彩感覚が優れているといえます。マクミランさんは、色の組み合わせによって生じている効果についてひ

<https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200012536/viewer>

とつひとつお考えを述べられました。

芸術家で様々な視覚表現に取り組まれているマクミランさんならではの視点ですね。



3, 卷子本『阿不幾集(あふぎしゅう)』の翻訳

マクミランさんの翻訳は、ただ文字の意味を置き換えるのではなく、和歌についての研究や、鑑賞の在り方を何度も検討されたうえ

平成 30 年 5 月 22 日 (火)

で行われています。

この度の試みでは、注釈をマクミランさんの英訳にどのように活かすのか。

恋田先生とのワークショップを設け、『阿不幾集』^{あふぎしゅう}冒頭の 8 首について検討しました。

〈木賊^{とくさ}をどう訳すか〉

『阿不幾集』5 首目の和歌「木賊刈る 園原山の 木の間より 磨かれ出づる 秋の夜の月」(現代語訳：辺り一面に生えた木賊を刈っている園原山の木の間から、まるでその木賊で磨かれたかのように澄み切った明るい秋の月が出ていることよ)は、木賊^{とくさ}の産地園原山に浮かぶ美しい月を詠んだ歌です。

「木賊」とは、乾燥させて木地や骨、爪など物を磨くために用いる植物として知られ、和歌の常套表現として、美しい月を「木賊に磨かれたよう」と描写されています。

この和歌を鑑賞するには、「美しい月」＝「木賊で磨かれた」というイメージが結びつくことが大切ですが、英訳した場合に、木賊で物を磨くという習慣について、どのように表現するのが良いのでし

³ 四番目物。作者不詳。都の僧が分かれた父に会いたいという松若を連れて松若の故郷信濃国園原を訪れ、木賊を買っている老人の宿を借りる。老人はかどわかされた子への悲しみを語り、形見の衣装

ようか。

磨いて表面をきれいにするという機能をもっているので、「サンドペーパー」と言い換えたり、あるいは注でその風習について説明することも可能です。

しかしマクミランさんは、この歌のイメージや世界観を大切にするために、もっと違う工夫が必要だと感じたそうです。

恋田先生の解説によると、この和歌は当時流行した謡曲「木賊」³を踏まえている可能性が高いそうです。



をまとめて子が好んだ小歌や曲舞をうたう。都の僧はこれが松若の父と気が付いて、父子を再会させる。

平成 30 年 5 月 22 日 (火)

謡曲「木賊」には木賊刈りの老人が登場するのですが、そのイメージを引き継いで、祇園祭の山鉾「木賊山」のご神体⁴も、謡曲と同様に腰に蓑をつけ、左手に木賊、右手に鎌を持った姿です。

『阿不幾集』の扇にも同様の姿をした男たちが描かれており、謡曲のイメージが影響を及ぼしていることがうかがえます。

近世期の絵画や工芸資料にも謡曲「木賊」の影響を受けた図様が確認され⁵、『阿不幾集』はそうした図像化の早い例としても注目されるそうです。

マクミランさんはこの説明を受けて、『阿不幾集』も描かれた完成された世界観を表現するために、「木賊」の訳し方に特に工夫が必要だと考えられたそうです。



〈なぜ隣が見えたのか〉

『阿不幾集』6首目の和歌「隔てつる 竹をよの間に 降りしきて

⁴ 写真は

<http://www.gionmatsuri.or.jp/yamahoko/tokusayama.html> より転

載。

⁵ 葛飾北斎「詩歌写真鏡・木賊狩」、円山応挙「木賊に兔図」等。

平成 30 年 5 月 22 日 (火)

隣を見する 雪のあけぼの (現代語訳: 隣家を隔てている竹に夜中
中雪が降り敷いて、その雪明かりに照らされ、ほのかに隣の様子が
窺い知れる夜明けであるよ) は、「なぜ隣が見えるようになったのか」
という点で解釈が分かれるでしょう。

ひとつは、家と家の間に竹があり隣の家を隠していたが、積もつた
雪の重みで竹がしなったため見えるようになったという解釈、もう
ひとつは、暗闇で見えなかったが雪明かりで見えるようになった
というものです。

この歌を載せる『菅家金玉抄』の詞書⁶には、「夜半にふる雪の降
しきて打なびきたる」という文言があり、前者の訳ととれますが、扇
の草紙のように歌と扇絵のみを記すものでは、詞書に限定されない
自由な解釈も考えられるでしょう。

『阿不幾集』の絵を見てみると、隣り合った家の周りに竹が描かれ
ており、解釈を決定づけるポイントにはなりません。ワークショップ
でも様々な意見がでましたが、マクミランさんはあえてそこを決
めず、この歌の抒情的な魅力を引き出す訳のほうが適しているの
ではないかと考えられました。

この歌の鑑賞のポイントは、「なにが家同士を隔てているのか」で
はなく、「いかにドラマティックに雪が積もったのか」にあると考

⁶ 詞書は以下のとおり。「右の哥、隣家をたがひに隔つる竹の一村
をも思はずも夜半にふる雪の降しきて打なびきたるを、つとに起て

られたそう。クライマックスが、「雪のあけぼの」という句にあると
感じられ、その詩的な表現を強調する英訳を試みようと考えられた
ようです。

『阿不幾集』の絵が、和歌の内容を説明的に表していないのも、歌
のもつイメージの力があり、鑑賞する人が想像力で補えるからでは
ないかという話に発展し、マクミランさんがこのワークショップを
踏まえてどのような翻訳をされるのか、ますます楽しみになりました。



見れば となりを見せたる雪の曙とよみ給ふ也。ふしこそなく白き
糸を打栄たるやうに すか / \ といひたたえる哥也」